

スクーバ・ダイビングによる精神的リラクゼーション効果

○加藤淳一*¹ 荒川雅志*¹ (*¹琉球大学大学院観光科学研究科)

キーワード：マリンレジャー、沖縄観光、POMS

【背景】スクーバ・ダイビングは海洋レジャーあるいはマリンスポーツの一つとして広く定着普及している。国内第一のメッカである沖縄では、スクーバ・ダイビング来訪者は一般の観光客に比べリピート率が高く、来訪間隔が短く、滞在日数が長く、消費額が高いという特徴を持っており、スクーバ・ダイビング自体の魅力は高く地域産業振興にも寄与していることが報告されている。一方、スクーバ・ダイビング研究では減圧症の問題、器材の研究、安全対策などに重点がおかれ、学術文献データベースでもこうしたテーマが散見されるのみで、スクーバ・ダイビングの満足度、心身に及ぼす影響、とりわけメンタル面への効果を検証した研究はほとんど見られない。【目的】生きがい満足度やQOLの観点からスクーバ・ダイビングの心身への効果を調査分析する。【方法】平成26年5月～7月の期間にNPO法人美ら海振興会所属のダイビング事業者に協力を仰ぎ、アンケート調査票を500部配布した。一般ダイバーに事前・事後調査として気分プロフィール調査POMS(30項目短縮版)、事後調査において基本属性およびレクリエーション効果チェックリスト(10項目)への回答を求めた。【結果】【結論】現在、集計分析中のため学会当日に詳細を報告する。

日本百名山における登山道整備や植生復元の活動およびその主体に関する基礎的研究

栗田 和弥 [東京農業大学地域環境科学部]

キーワード：日本百名山、自然保護、登山道、植生復元、活動主体

『日本百名山』は1964年〔昭和39年〕7月20日に深田久弥によって執筆、出版された。これはその後の登山者が目標とする山の事実上のスタンダードとなったと考えられる。また、同年10月10～24日に「東京オリンピック」、11月8～12日には「東京パラリンピック」が開催され、様々なスポーツへの参加の機運が高まったとされる。他方で、わが国の自然公園や登山の対象とする山には登山者の規制等が設けられていない事が多く、やがて過度な利用によって登山道や周辺の植生はダメージを受けた場所もあり、その後の多雨多雪の影響等により二次的なダメージも受けるようになった。これらに対処し、維持管理・復元のために、行政、地域住民、山小屋経営者等を多様な主体として活動が展開されてきた。しかし、それらの現状や復元の進捗の情報、経験などから得られた知見、技術の蓄積および他の山域で必要とされるであろう、共有・移転等が実際には活発に行われていないというのが実情といえる。そこで本論では基礎的な研究として、多様な保全活動の主体(担い手)やそれらの活動内容の変遷を時系列に追い、内容について整理を行った。